

No. 1079

長生きの幸福

300円

さわやかな初秋の風に乗って老人たちの元気な歌声が響いて来る。東京青梅市、聖明園のコーラス・グループ「ザ・イレバーズ」。盲老人ホーム、聖明園には今159人の老人がいる。

老人たちの朝は早い。朝日に向っての体操で一日が始まる。グループ活動は唯一の楽しみである。ネンド細工や点字教室、休む人はいない。雑布作りも、もう10年になる。この間、縫いあげた雑布は一万枚を越えた。今年も市へ寄贈した。世間と断絶しがちな老人たちの市民との交流である。敬老の日の9月15日、恒例の点字修了式が行なわれた。60の手習い、困難を克服し、今年6名が修了した。慰問に来てくれた「出雲そば」に舌つづみ、敬老の日を祝った。

老人たちにとって朝夕の散歩は欠かせない。小鳥のさえずりが聞える庭園、誰からともなく吟詠が始まった。その姿は長生きすることの幸福に包まれていた。

おれ達は狂走族

299円

スピード。若者達は今、自分達にこれしかないと思う。もう秋。富士スピードウェイのパドックを借りて4つのグループがスピードと技を競い合ったジムカーナレース。幼い頃の運動会のように自分のチームを応援するスピードにつかれた若者達。俺達はとにかく突っ走りたい。なんと言われようとスピードをだせるだけだして。そんな若者達は、一步都会に戻れば、狂走族カミナリ族のレッテルをはられる嫌われものだ。

「17才新聞屋、17才ガソリンスタンド。別に平気だよ。世間の目なんか関係ないもん。今若さを発散するのはバイク位だもん。おまわりなんかも、悪いものと決めつけてというのが気に入らないなあ。ガソリン代月に八千円位かなあ。オートバイは親と半々で買った。親のスネカジリだからかかっている方だよなあ。親は反対します。うちは夜走ると、事故を起こすなという。もっと静かに走れという。でもオートバイはうるさいもんだもんなあ。うちなんて全然いわれない。朝帰り専門だもん。何にもいわれないよ。ただおもしろいかって。若いうちにやりたいことやらなきゃ。もう少しして、20才位になったら、できなくなっちゃうもんなあ。」

昆沙門天。関東の中でも大きなグループのひとつだ。千人は越すだろうという。平均年齢17才。土曜日の夜、彼等は集合し、都内を走り廻る。遠出をする時もあるという。30台位集合した時、パトカーが駆けつけた。1人の若者が角棒を振っていたとかで連行された。全ての車が狂器を持っていないか調べられた。リーダーが全員をあつめ、走る前に注意を与えた。

「今、他のチームはもめごとが多いから絶対にけんかをしないように。警察はぶっつぶれるのを待ってるんだから。そしたら走れなくなるからな。単車の連中も今は絶対にけんかするなよ。おそわれた場合は逃げること。なあ、ゆっくりいこうよ。」そして彼等は都会の夜を走り廻る。

いつの時代にも、スピードにあこがれ、スピードに若さを発散する若者達はいた。そしていつの時代にも彼等は世間から嫌われた。それでも彼等は走る。これからも彼等はうまれるだろう。

どこまで走っても、今走る道が自分達の道にならないことを知っていても。